

北九州大学外国語学部紀要
開学五十周年記念号 抜刷（平成九年三月）

湖上扶揺子陳湊

古勝正義

湖上扶揺子陳湊

古 勝 正 義

はじめに

古呉墨浪子の名で出された清初の短編小説集『西湖佳話』は、他の多くの通俗小説と同様、作者が明らかにされていない作品の一つであるが、この本の作者は、ほかに少なからぬ作品に関係していると考えられ、この作者の実名と経歴が明らかになれば、それにともなつて解明される事柄は相当広い範囲に及ぶものと思われる。

墨浪子とはどのような人物か。『西湖佳話』の本文と序文から、作者像について直接知り得ることはきわめて限られたものである。作者が杭州の出身であること、長期にわたつて西湖に親しんだ人物であることは、まず動かしがたい。もっとも、「古呉」墨浪子と称していることに、若干の疑問もないではない。作者がこの「古呉」を自分の出身地として用いたのか、一時の寄留地として用いたのか、判然としないからである¹⁾。岳飛・于謙といったいわゆる「民族英雄」をとりあげた作品から推すと、作者自身、民族的な屈辱を体験した世代に属していると思われる。「隠」への傾斜を強くもっていることも、これと関係があるう。作品のなかに駢文その他さまざまな文体を連ねていて、そういったも

のを自在に駆使できる人物であるらしい。とはいっても、本文および自序のみによっては、筆名の背後に隠れた作者の素顔に近づくことは、とうてい望めない。

しかしながら、『西湖佳話』という書物を全体として見た場合、作者の身許秘匿にはだいぶ綻びがある。『西湖佳話』には、精巧な図版が附されているが、そのなかに何人かの人物が実名を出しているからである。綻びがあるというよりも、作者はもともと完璧な匿名性を意図しているわけではない、といったほうが正確であろう。

本稿では、この図版部分に着目し、これに跋語を書いている「湖上扶揺子」とは陳扶揺すなわち陳湊であることを述べ、その生涯の概略をたどる。陳湊には『秘伝花鏡』という園芸関係の著作があるが、このよく知られた書物の著者としても、その生涯の事績は埋もれたままである。

一

『西湖佳話』は西湖に縁の深い十六人の人物を主人公にした十六篇の短篇をまとめた白話小説集である。初期の版本は封面に「金陵王衙藏板」と題しているが、そのうち、墨浪子の自序が丸みのある顔体で書かれたものが原刻本である。国内では大阪大学文学部懷徳堂文庫蔵本を見ることができたので、以下この本による。

金陵王衙本には、墨浪子による自序のあとに、多色刷りの図版を中心とした「西湖佳景」と題された部分が入っている。この多色刷りの図版は従来版画史の面からも注目されてきたところであるが、図版部分はまた、いくつかの重要な人名をとどめていて、『西湖佳話』の作者の問題を解く重要な手がかりを提供している。

図版部分全体の構成は、まず目次があり、そのあとに多色刷りの図版「西湖全図」一幅「西湖十景図」十幅が続き、

最後に「湖上扶揺子」による跋語が附されている。西湖十景を描いた十幅には、さらにそれぞれの風景にちなむ先人の詩句を配してある。

図版の目次の示すところによれば、西湖十景の図は大きく二とおりに分かれる。一つは歴代名家の作風をまねて描いたというもの。「蘇堤春曉」の図は唐の薛稷に、「柳浪聞鶯」は北宋の郭熙に、「南屏晚鐘」は元の信世昌に、「三潭印月」は北宋の范寛に、「雷峰夕照」は南宋の馬遠に、それぞれならったものと、目次は記す。一つは名家の作を模刻したというもの。「麴院荷風」が元の盛子照、「花港観魚」が元の趙孟頫、「平湖秋色」が明の沈啓南（石田）、「両峰挿雲」が明の藍田叔、「断桥残雪」が五代の郭忠恕の画を、それぞれ模刻したということになっている。このうち、藍田叔は康熙初年まで存命していた画家である。

西湖十景を描いた十幅に配された詩句は、さまざまな書家・字体をまねて書いてある。この部分の制作には明らかに複数の人間が関与している。たとえば「平湖秋色」の図に配された孫太初の句を書いたのは王楫であることが明記され、また、「花港観魚」に配した唐人の句は王臬が書き、「南屏晚鐘」に配された王洧の句は孫肇功が書いたことが明記してある。ほかの七幅には書き手の名前は記さない。「蘇堤春曉」の題辞は歐陽詢にならった楷書である。「麴院荷風」の題辞は香山（白居易）の句を王猷之の書体で書き、「柳浪聞鶯」の題辞は張芝と李白の書体で葛道の詩句を書き、「両峰挿雲」の題辞は白居易の詩句を漢隸で書いてあるが、書き手は明記されていない。

ともあれ、少なくとも王楫、王臬、孫肇功の三人が図版部分の制作に関わったことは、これで確かめられる。

ところが、懷徳堂文庫蔵本では十幅の題辞すべてに印が捺してあり、この三人のほかに王概の名も確認できる。王概と王臬は、のちに『芥子園画伝』を制作した兄弟。彼らは、当然ながら「西湖佳景」の題辞のみならず、図版そのものの制作にも関わったはずである。

「西湖佳景」図は、全体を一人の人間が制作したわけではなく、王概や王臬、王楫、孫肇功ら複数の人間の手になったものである。そして、これを取り切ったのは「湖上扶揺子」である。というのは、「湖上扶揺子」と署名した次のような跋語が図版部分に附されているからである。

蘇公（東坡）・白傳（居易）が通靈の筆によって（西湖の）湖山を描写したのは、詩中に画あり、淡装濃抹すべてよし、というべきである。しかも、達者な画家が渲染してもなかなか表現しがたい意境を表現していて、一句一句が荊（浩）・関（全）の着色山水である。なぜこの図を作成したか。大体、下手な画家が紙や絵絹に描いたらそれでもう頼上の三毛を失い、版木におこすとなると西子を冒瀆する感はおさら強い。どうして蕭照・馬遠といった人々を起たして生面を開かせることができよう。私は長年この志を抱いてきた。広く蒐め精しく訂して頁若干を得た。画は名賢のものを彙め句は往哲のものを綜めた。景に即して皴を擬し山に対して色を施した。苦心して版木に彫り念入りに渲染した。このわざは蘇・白のわざであって、ただ蕭・馬の秘を発いただけのものではない。さきに詩中に画ありといったが、いまや画中に詩あり、である。東方（朔）の自賛と笑うことなく、西子が生けるがごとくであるのを見ていただきたい。

これで見ると、「湖上扶揺子」は『西湖佳話』の図版の制作において、明らかに特別の地位を占めていた。

この「湖上扶揺子」とは誰か。『西湖佳話』の初期の版本でも時代を経た後のものによっては、それを明らかにすることはできない。ところが、懷徳堂文庫蔵本では、署名のあとに、「湖上陳氏・扶揺」という印（連印）を捺してあって、跋語の筆者が陳扶揺であることがわかる。

二

「湖上陳氏・扶揺」の印は、『芥子園画伝』初集にも使用されている。その初期の版本のうち、中山善次氏蔵本（青木正児訳注・入矢義高校訂『芥子園画伝初集山水樹石』下冊に影印）では巻五の「武林 陳扶揺」の跋語に、大東急記念文庫蔵本では巻五の第二十四図に用いられているのがそれである。

『西湖佳話』に附された図版「西湖佳景」は、版画作品として見た場合、数年後に刊行された『芥子園画伝』初集（康熙十八年十二月李漁序）との間に密接な関係があることが見て取れる。特に、『画伝』初集巻五多色刷り「模倣各家画譜」と比較対照すれば、版画技法や着想から制作関係者にいたるまで、両者の関係の深さは一目瞭然である。

形式面でいえば、「西湖佳景」と『芥子園画伝』初集「模倣各家画譜」とは、ともに目次・図版・跋語と並べた構成になっていて、同じ形式である。着想についていえば、絵は歴代名家の画を模刻するか、歴代名家の画風にならって描くかした下絵の版刻という点で共通し、絵に配する題辞は、やはり歴代の詩人の詩句を様々な字体・書体を用いて書くという点で共通する。

このような類似は、『芥子園画伝』初集の制作者が無関係な他人として『西湖佳話』の図版「西湖佳景」図を模倣した結果生じたものではない。この両者は、制作関係者が重なっているのである。すなわち、「西湖佳景」図に捺されている「鬻画人」「莫愁釣者」「臥游・一丘一壑」（連印）「新亭技客」「孫肇功印」「家在鴛鴦湖上」「鹿砦・不知而作」（連印）「江栖楫」「王臬」「王概」の印は、いずれも『芥子園画伝』初集にも使用されている。王概・王臬・王楫・孫肇功の四人は、「西湖佳景」図の制作にも『芥子園画伝』初集の制作にも携わったことが、これでわかる。王臬（司直）は、

李漁の友人王輔（左車）の息子で、『芥子園画伝』初集を制作した王概（安節）の弟である。彼は初集の制作にも関与しているが、特に『芥子園画伝』二、三集の制作には長兄の王概、次兄の王著（宓草）とともに力を尽くした。

これに関連して版元についていえば、『西湖佳話』を刊行したのは「金陵王衙」という版元である。この名前からは、金陵（南京）の王姓の経営する版元ということ以外はわからないが、これは王概一家の書肆である可能性が高い。

「金陵王衙」は『西湖佳話』の版元としてのみ知られ、他の書物を刊行したという事実は確かめられない。その点と、『西湖佳話』の図版の制作に王概兄弟が関与している事実とを合わせて考えると、「金陵王衙」というのは王概一家が『西湖佳話』を刊行するために臨時に用いた書肆名ではないかという推測が、まず可能である。

特に注目したいのが、懷德堂文庫蔵本の封面に捺された大きな龍鳳紋の円印（径六十六ミリ）である。匡郭のなかの二本の野線の間隔を円印の径に合わせ、また、円印が捺せるように封面の上部に空間をあけた設計になっているのであるから、この円印が刊行当初からのものであることはまちがいない。これは版元の「金陵王衙」が一種の商標のように使用したものではないか。

「金陵王衙」が王概一家の書肆ではないかという推測をより強化するのは、同じ円印が『芥子園画伝』初集の初期の版本（上記の中山善次氏蔵本および大東急記念文庫蔵本）の封面にも捺されているという事実である。

もっとも、『芥子園画伝』初集の刊行者は李漁または彼の女婿沈心友（因伯）ということになっている。書名に李漁の園名である「芥子園」を用い、また同書の李漁の序および銭陸燦の跋語に、刊行の実務を取り仕切ったのは沈心友であるように書かれているために、李漁一家の刊行と見なされてきたものかと思う。封面は、匡郭のうえに横に「李笠翁先生論定」と書き、匡郭のなかは、縦に三行に、「繡水王安節摹古／芥子園画伝／本衙蔵板」となっている。この「本衙」とは李漁一家の書肆なのか、王概一家の書肆なのか。かりに龍鳳紋の円印が李漁一家のものであるとすると、これ

が『西湖佳話』の封面に捺されている理由が説明できない。『西湖佳話』に李漁または沈心友の手が入っている痕跡はないからである。『芥子園画伝』初集に捺された円印は、王概一家による「版権」主張の意味をもったものではないだろうか。

話を「湖上扶揺子」陳扶揺に戻すと、ともあれ彼が王概兄弟と関係の深い人物であったことは『西湖佳話』によってのみならず、『芥子園画伝』初集によっても確認できる。

陳扶揺の名は、『芥子園画伝』初集においては、さきに触れたように巻五に見える。『画伝』初集は、全体の序文を李漁が書き、巻五「模倣各家画譜」の「方冊式」十幅の跋語を銭陸燦が、「宮紈式」十幅の跋語を王概が、「摺扇式」十幅の跋語を沈心友が書いている。そして、「横長各式」十幅の跋語を書いているのが、この陳扶揺なのである。彼が「画伝」の制作刊行にどのように関与したか、詳細は不明であるが、彼の跋語は、少なくとも彼と王概兄弟らとの親密な関係を物語るものである。彼は、王概が丁巳（康熙十六年）から己未（康熙十八年）の冬まで四十余月をかけて本書を完成したことを述べて、「議論の正確、模写の詳晰は、まことに画学の金針である。鐫刻の神巧、渲染の精工は、まことに芸林の玩宝である」と推奨している。

鍵となる人物は李漁であろう。李漁と王概兄弟の関係はいうまでもないとして、陳扶揺もまた李漁の交遊圈内の人物なのである。

康熙九年（一六七〇）、李漁が六十歳で第六子をもうけたとき、彼は「賀笠翁六秩寿第六子」を書いて祝い、李漁の女婿沈心友の編んだ『四六初徵』巻八に収録されている。文章の筆者は「陳湊 扶揺」となっている。後述するように、湊がその名、扶揺はその号である。陳湊は文中、十年前、李漁五十歳のときに触れ、当時、李漁にはまだ男児がなかったことを言う。『李漁交遊考』（『李漁全集（修訂本）』巻十九、一九九二）の編者単錦珩氏もいうように、康熙九

年の時点で二人は十年以上の交遊をもっていた。李漁の園名を冠した『芥子園画伝』に陳扶揺が跋語を寄せたのは、王概兄弟との関係にくわえて、李漁とのこうした長期にわたる交遊によるものである。

彼らの交遊関係は次世代も含んで成り立っていた。李漁の『閑情偶寄』に評語を寄せている陳枚（字は簡侯）は陳漠の長子であるが、彼はもともと、李漁の女婿になった沈心友の親友である。

「西湖佳景」に題辞を書き『芥子園画伝』初集（および二、三集）に印影をとどめる王楫が、『四六初徴』巻一に二篇の文章が採られている王楫と別人でないなら、彼もやはり李漁交遊圏のなかにいた人物である。

李漁、陳扶揺、王概一家を含む以上のような交遊圏のなかで制作刊行されたのが、『西湖佳話』と『芥子園画伝』初集なのである。

このように見てくると、『西湖佳話』の「湖上扶揺子」陳扶揺が『芥子園画伝』初集の「武林 陳扶揺」と同一人物であることは、もはや動かしがたい事実といわなければならない。『西湖佳話』と『芥子園画伝』初集の初期の版本に「湖上陳氏・扶揺」という同一印が捺されていることに、いかなる不審もない。

ちなみに、「湖上扶揺子」の跋語は、通常とは異なる装飾的な野線に書かれている。野線と罫線の間が上下ともそれぞれ小さな弧で連結され、全体として見ると、木簡あるいは割竹を並べたような効果を出している。これと同じ様式の野線が『芥子園画伝』初集の陳扶揺の跋語にも使用されている。陳扶揺の一つの標識と見なすことができる（また、彼の息子陳枚は『増状元図考』において、やはり同一様式を使用している）。

それでは、「湖上扶揺子」陳漠とはどのような人物か。

三

陳漠は『秘伝花鏡』の著者として最も知られる。普通『花鏡』と呼ばれるこの書物は園芸専門書として重視され、清代に版を重ねたばかりか、日本でも翻刻がなされた。

ところが、その著者陳漠の生涯については、もはや完全に忘れ去られている。杉本行夫編訳『秘伝花鏡』（一九四四）の序で、青木正児は、「著者の事績は一向知れない。僅に本書の張国泰の序文によって、彼は浙江省杭州の人で、文才を抱きながら不遇にして久しく南京に僑居し、晩年帰郷して西湖の畔に隠れ、園芸を楽しんで此の書を編したと云うことを知り得るのみである」といつている。王毓瑚『中国農学書録』（一九六四）は「漠子、一名扶揺、自ら西湖花隱翁と号する。生平始末不詳」とする。伊欽恒校註『花鏡（修訂版）』（一九七九）引言によれば、梁家勉・鄧裕洵両氏も考証したが、『清史稿』『碑伝集』『国朝著献類徴』『文献徵存録』『国朝先正事略』『浙江通史』『杭州府志』など、どの文献からも名前を確認できなかったという（両氏の考証未見）。

確かに彼は、「名を経伝に見ない」という形容の当てはまる人物といつてよいかもしれない。時の経過とともに忘れられたのは、当然それなりの事情があったにちがいないのである。しかし、その事績が言うに足りないものであったためかどうかは、にわかに定めがたい。

陳漠の伝記資料は『花鏡』の張国泰の序文だけというわけではない。彼は、もともと文筆家であつて、『花鏡』のほかに、いくつかの書物がその手で編集刊行されていて、その生涯について知る手がかりになる。なかでも大きいのは、長子の陳枚がやはり文筆家で、その編集した数点の書物が、幸いにも禁書の網にかかることなく現在に伝わっていることである。そこには、彼の伝記事実を伝える貴重な資料が収められている。

『憑山閣増訂留青全集』二十四卷 康熙二十三年序刊本

『憑山閣留青采珍全集』二十四卷 康熙四十二年序刊本

『憑山閣増輯留青新集』三十卷 康熙四十七年沈心友校刊本

『尺牘写心集』四卷 康熙十九年序刊本

これらに先だって『留青集』『留青二集』『留青広集』が刊行されたが、前の二書は現在見ることができるとは明かでない。『憑山閣増輯留青新集』は、陳枚が編集した一連の留青集の最後のもので、刊行は編者の没後である。この他、

『尺牘写心二集』六卷 康熙三十五年刊本

があり、これにも陳湊関係の資料が入っている可能性が高いが、未見。

これらのうち、『憑山閣留青采珍全集』に収める林雲銘（西仲）「寿陳扶揺先生七十序」は、一九七八年に、誠堂「記『花鏡』作者陳湊子」という短文がとりあげたことがある。文章の筆者は、この資料をもとに、従来『花鏡』の序文から推定されていた著者陳湊子の生年の誤りをただすとともに、同じく『花鏡』の序文から想像された著者の人物像が修正されるべきことを指摘した（『中華文史論叢』第七輯復刊号）。ただ、林雲銘「寿陳扶揺先生七十序」（以下、「寿序」と略称）に劣らず重要な方象瑛（渭仁）「扶揺陳先生暨元配戴孺人合葬墓誌銘」（以下、「墓誌銘」と略称）などに言及していないところを見ると、この筆者は『憑山閣増輯留青新集』（以下、『留青新集』と略称）を見ていないようである。

以下、利用しえた資料をもとに、陳湊の生涯をたどってみる。

「墓誌銘」によれば、陳湊は錢塘の人。字は爰一、扶揺と号した^③。『花鏡』では「西湖華（花）隱翁」とも号している。「子」字をつけて「陳湊子」と署名することが多いが、もちろん別人ではない。生年については、『花鏡』自序に、「年来虚しく二万八千日を度った」^④とあるため、従来、これをもとに明・万曆四十年（一六一二）頃の生まれという推定がなされている。しかし、「寿序」によれば、彼は康熙二十三年（一六八四）の四月に七十の誕生日を祝っている^⑤ので、万曆四十三年（一六一五）の生まれと確定する。『花鏡』自序は、やはりあくまでも概数を書いたにすぎず、正確な数字ではなかったことになる。その家は代々、医を業とし、祖父の象先、父の芝仙はよく知られた人物だったらしい。家伝の秘籍を火事で失ったために、陳湊自身は医家として身を立てることはなかった（「墓誌銘」）。もっとも、医家の子弟として生まれたことが、その生涯にどのような影響も及ぼさなかったとは考えられない。

父親の陳芝仙については、杭州で小築社、読書社を主宰した嚴調御（印持）や、袁宏道（中郎）、王維城らとの交遊が確認できる。『尺牘写心集』（以下、『写心集』と略称）には、袁宏道からの書簡「答陳芝仙」が収めてある（巻二）。陳枚は、袁宏道と陳芝仙は「莫逆の交」だったといっている。また、この書簡から、陳芝仙一家が呉山に居を構えていたことが推測される。

林雲銘「寿序」に、「弱冠にして名声あり、文品卓卓として、儒林の領袖であつた」とあるのは、いくぶんかの誇張を含んでいるにせよ、明清鼎革前、まだ二十代のときに『兩漢奏疏』『周文婦』などの書物を編集刊行したことは事実で、この二書は今日でも見ることができ（東京大学東洋文化研究所蔵）。同じく「寿序」に、「およそ評定するところの六経講義および周秦兩漢の文章は典則として奉じられざるはない」とある。その評定にかかる「六経講義」なるものは確認できないが、「周秦兩漢の文章」の評定とは『兩漢奏疏』『周文婦』などのことを言ったにちがいないから、「六

『花鏡』張国泰の序に、次のようにあるのは、この明清鼎革前の時期のことを言ったものか、あるいはもっと後の時期まで含めて言ったものか。「総てその著作は大にしては経済、微にしては理学であり、すでに之を世に公にすること久しい。その淵源を遡ること遠くは太古、近くは来年、その間奥を探らぬはない。才は繡虎と称せられて屈原・宋玉に比肩し、筆は雕龍を擅にして潘岳・陸機に武を接する。それで太玄経が就って揚雄の亭に履の満つるごとく、長門賦が成って司馬相如の席に黄金の艶やかなるごとくである。こぞって祭酒と推して博雅を壇に登らしめ、競うて宗匠と号して典型とあがめた」。

『西漢奏疏』(『西漢奏疏』八卷、『東漢奏疏』八卷)は、漢代の奏議を唐順之・茅坤の注とともに編集した書物である。序文を黃端伯と祁彪佳が書き、「鑑定姓氏」として文震孟以下三十三名が名をつらね、^①「參校姓氏」として鄭尚友以下九十三名が名をつらねる^②、という堂々たる構えの書物である。この「鑑定」「參校」が、当時の流行にならった形式的なものであるにせよ、錚々たる顔ぶれは目を見張らせるものがある。崇禎九年(一六三六)に書いた「凡例 并引」に、「湔子^③は稚にして且つ愚」と自ら述べているとおり、当時、彼はまだ二十歳をすぎたばかりの若者であった。杭州の文社、読書社については、二十二名の成員が明らかにしているだけであるが(朱倬「明季杭州読書社考」、『国学季刊』第二卷第二号)、「鑑定姓氏」「參校姓氏」には、そのうち聞啓祥、嚴調御ら十人の名前が含まれている。陳湔は読書社に加入していたのではあるまいか。

『周文婦』二十卷は、『四庫全書總目』に原編者の鍾惺の名で著録されるが(卷一九三、集部、總集類存目三)、その説明を借りれば、「三礼、爾雅、家語、三伝、国語、楚詞、逸周書を刪節して一篇となし、時文の法をもって評点をくわえた」ものである。顧錫疇、胡揆、包士瀛が序を書き、彼自身は「大凡」を書いている(崇禎十三年、「古杭陳湔子」と署名)。「四庫全書總目」の評価は、「明末の士習、輕佻放誕にして、あえて聖經を刊削するにいたる。悍然として顧

みないもの、というべきである」と手厳しい。

これらの書物は、版元の表示がないこと、「凡例」「大凡」を陳湔が書いていることから見て、陳湔が編集者兼刊行者として出したものと思われる。

そのほか、彼が明末に刊行したと思われる書物に、『西漢文婦』八卷、『東漢文婦』七卷がある。これは未見であるが、『東北師範大学図書館蔵古籍善本書目解題』(一九八四)に、「明鍾惺輯注、……明陳湔の崇禎丁丑十年の序あり」とある。

明清鼎革はその三十歳前後のときのことである。『西漢奏疏』のために序を書いた黃端伯と祁彪佳は、ともに明に殉じた。『周文婦』の序を書いた友人の胡揆(仲衍)も死んだ。彼自身は、林雲銘「寿序」によれば、「跡を窮巷に隠し、藤蘿をもって自ら蔽い、後進と青紫を分かつことをやめ、門を閉ざして書を著し、竹を植え花に灌いで意を適めた^④」。陳湔自身の言葉でいえば、「(生涯の)大半は断簡残編に沈酣し、半ばは園林花鳥に情を馳せる」生活であった(『花鏡』自序)。半ば云々とは、入清後のことを指して言ったものにちがいない。

「墓誌銘」によれば、かねて秣陵の名勝を愛し、そこに遊びたいものだと思っていたときに、たまたま李漁が南京に居を定め、「杖履の老友」として呼んでくれたので、その地に「遨遊」することになったという。張国泰も、「白下(南京)に遨遊して」云々と書いている(『花鏡』序)。「遨遊」というが、実際は、次に見る查繼佐あての書簡に明らかにように、生計の途を求めている「浪遊」であった。家族は杭州にのこしていたと思われる。

南京に生活の足場を移した正確な年代は分からない。李漁が杭州から南京に転居したのは順治十三年(一六五六)またはその翌年のことだという(単錦珩『李漁年譜』、『李漁全集(修訂本)』卷十九所収、一九九二)から、陳湔はこの年に南京へ行ったものと考えられる。彼が查繼佐にあてた「寄查伊璜」(『写心集』卷二)は次のとおりである。

さきに兄と軒を並べて住みながら、うちとけて語らい色々と教えていただく機会を多くもてないまま、飢えに駆られて家を離れ、二十年も浪遊することになりました。憶えば昔、篁嶺に風に吟じ、長廊に月に酔ったこともありましたが、渺としてかなわぬことになりました。今ごろになって、家に在ったときに常時教えを請わなかったことが悔やまれます。③

查繼佐（伊璜）は『兩漢奏疏』の「參校姓氏」に名をつらねている。彼が死去したのは康熙十五年（一六七六）正月二十日のことである（『查東山先生年譜』）。この書簡が查繼佐の最晩年、つまり康熙十四年頃に書かれたとすると、順治十三、四年はそれのおよそ二十年前にあたり、「二十年も浪遊」したという記述と合致する。

この書簡からさらに二つのことが知られる。一つは、陳湊の南京行きが実は「飢えに駆られて」のもの、生計の途を求めてのものであったことである。二十年の生活基盤はきわめて不安定なものであったと推測される。いま一つは陳湊一家の住まいについてである。查繼佐は順治十一年以降、呉山鉄冶嶺に築いた敬修堂で講学していたという事実があり、陳湊はその隣家だったというのであるから、正確には呉山の鉄冶嶺に居を構えていたわけである。

康熙初年に南京に仮住まいしていた陳湊が呉百朋（錦雯）の帰郷を送った「客秦淮送呉錦雯旋里」という詩を作っている（『留青新集』巻五）。詩の凄然とした気分は呉百朋の身に起こった不幸な出来事に由来するが、異郷に漂泊する陳湊自身の落寞たる境遇も思わせる。呉百朋が南京を引き上げて杭州に帰った前後の経緯については、孫治（字台）の「亡友呉錦雯行狀」（『孫字台集』巻二十四）に語られ、また、王概の岳父にあたる方文の「送呉錦雯歸杭州」という詩（『畚山統集』）から、それが康熙元年（一六六二）秋のことだったことが分かる。陳湊の詩は次のように詠われる。

君は泛かぶ帰莊の棹

余は除ばす旅況の時

征鴻 夜月に孤く

殘菊 霜枝老ゆ

歴落として頻りに感生じ

悲涼 酒匜に備る

懷を寄するに一として可なるなく

留別 語は遅遅

康熙四年（一六六五）、張國泰の父張芝夢（鄒彥。『四六初徵』巻四にその文「辭祝寿偈言」を採る）の五十の祝いのために寿文を書いた（『留青新集』巻一「張鄒彥五秩寿序」）。二人は息子どうしが学友という関係で順治十二年（一六五五）に知り合い、以後十年間親しく往来していた。そのなかに、「私は咎を畏れるゆえに隻詞も浪りに予えない」とあるのは、文網を恐れなければならない文筆家としての微妙な立場を語ったものではあるまいか。彼はまた、「私は戸に鍵して株を守り、空齋に坐して老いる」とも言っている。ただし、これが南京で書かれたものかどうかは分からない。というのは、順治十三、四年以降、まったく杭州を留守にしていたわけではなく、南京を足場に各地を遊歴し、時に杭州に戻る生活だったと思われるからである。

孫子起（楚欽）が彼の妻戴氏の五十の祝いのために寿文を書いている（『留青新集』巻一「寿陳母戴孺人」）。陳湊と

戴氏の年齢差を二歳と仮定すれば康熙五年がその五十歳にあたる。およそその前後に書かれたと考えてよからう。それによれば、陳湊は交遊を好み、西湖遊覧にやってくる四方の人士がみな彼を訪ねたという。しかし、孫子起はまた、彼が遊歴に出たときは、戴氏はしっかりと家の中を治め、彼を心配させなかった、とも述べていて、陳湊があるときは杭州の自宅にとどまり、あるときは外地を遊歴する生活に入っていることが知られる。

吳国縉（玉林）が陳湊にあてた次の書簡（『写心集』卷二「与陳扶搖」）は、南京での生活の一面を伝えていると思われる。吳国縉は、順治六年の進士。江寧府教授であった。『儒林外史』の作者である吳敬梓の曾祖父吳国対の兄にあたる。陳湊は彼と親交があった。李漁も交遊があり、『四六初徵』（康熙十年）に序文を書いてももらっている。

雨のために元宵の祭が台無しになり、荒斎にこもっています。家族はみな先日北岸にわたって（帰郷し）、冷たい寝床の独り寝は、ついに老兄と同じようなことになりました。ご都合がつかましたら、戸締まりを下僕にまかせて一蹇に騎り、お出かけください。二三日語りあうのも、悪くないと思います。⑩

南京に足場を置いていたこの時代、彼は、李漁とともに「登臨憑弔」するかたわら、書物の校訂に従事し、いよいよ名声があがったという（『墓誌銘』）。ただ、行動範囲について補足が必要であろう。彼の南京行きが秣陵の名勝を探るというかねての望みをかなえるという側面をもったものであったことが事実であったにしても、その遊歴の足跡が南京周辺に限られたものであったとは考えられない。李漁の「杖履の老友」として「登臨憑弔」したのであれば、陳湊自身の遊歴も、その性格、範囲は当然、李漁のそれとかなり重なっていたであろう。

また、書物の校訂というのも、額面通りにうけとるわけにはいかない。張國泰によれば、「白下（南京）に遨遊して

著書は家に満ちた」といい、「墓誌銘」も「研京鎔都」という語で、彼の南京時代を表現している。しかし、これらの記述から、彼が南京でひたすら學問研究に打ち込んでいたと考えるのは、もとより当たらない。根拠の第一は、彼が「飢えに駆られて」杭州を離れたと言っていること、第二は、彼がある人にあてた手紙のなかで、自分の生活を、「南畝に硯田を徒らにし」と表現している（後述）こと、である。彼の「著作」活動は學問的なものではなく、商業出版に携わる職業的な文筆家としてのそれだったと考えなければならない。康熙十二年に出版された『西湖佳話』の図版の制作に実際に彼の手が入っているとしても、それは、そのような職業作家の副次的な仕事にすぎなかったであろう。

南京を足場にした「浪遊」は二十年という長期におよんだ。彼を南京によんだ李漁は康熙十六年（一六七七）に杭州にもどった。陳湊の帰郷も同じ頃のことではあるまいか。かりに康熙十六年に帰郷したとすると、六十三歳のときである。「墓誌銘」には、「晩年、齒日に進み、倦んで郷里に帰った」とある。なお、長子の陳枚は、李漁と一緒に「傍求」した時期もあるというが、最初の『留青集』を、おそらく杭州で、康熙十一年以前に刊行した。周亮工（康熙十一年没）がそれを贈られて礼状を書いている（『写心集』卷三「与陳簡侯」）からである。彼はその後、康熙十一年春に『写心集』の編集にとりかかり、十九年夏にこれを完成させた（『写心集』凡例）。序は同じく十九年五月に杭州の憑山閣で書いている。馬銓（遵素）「祝陳簡侯七十」（『留青新集』卷五）によって、憑山閣は吳山にあったことが確認できる。陳湊が相続した鉄冶嶺の敷地に憑山閣も建っていたと考えられる。

画家の胡文祥（楨菴）が陳枚にあてた手紙（『留青新集』卷十四「与陳簡侯」）は、陳湊が杭州に戻った後のものである。それは、陳枚に、完成したばかりの「画譜」を一冊恵与してほしいと依頼したもので、陳湊と商業出版の関係を知らうえでも重要な資料である。書かれた年代については明記がないが、「画譜」とは『芥子園画伝』初集のことであるから、その刊行から間もない頃とすれば、康熙十九年頃に書かれたことになる。胡文祥は、前の年の初夏に会った

ときに、陳枚が「指染梅花」を見せてくれたことと、「西湖佳景集」を贈ってくれたことに触れている。「指染梅花」はおそらく朱御九の作品であろう（陳枚に「題朱御九指梅簪松冊跋」がある。『留青新集』卷三）。原画だから見せる（示）にとどめたのにちがいない。

胡文祥が陳枚から贈られたという「西湖佳景集」が『西湖佳話』のことであることは、あらためて言うまでもない。ただし、『西湖佳話』そのもののなか図版部分「西湖佳景」なのかということになれば、可能性としては両方とも考え得る。版画としてのできればえからすると、図版部分だけを独立させて印刷し、これを一種の美術品として文人間の贈答に用いたとも推測できる。しかし、実際には、陳枚は『西湖佳話』そのものを贈ったのではないか。このことは、『西湖佳話』の作者の問題と直接関係する。

「画譜」について、胡文祥は、「画譜がすでに完成したと聞きました。尊父が胸に丘壑を蔵し風雅を発揚してくださらなかったら、この壮挙はなかったわけで、まことに画苑の一大奇観です」と書いている。陳湊が関係したことを確認できる画譜は、『芥子園画伝』初集のほかにはない。胡文祥の書き方からすると、陳湊は『芥子園画伝』初集において、なにか実質的な仕事をしたようにも読める。

晩年は西湖の湖畔で隠棲の生活を送った。「乃ち帰來の高士が東籬に退老し、知止の名流が北牖に養安するあり」（張国泰）。康熙二十三年（一六八四）四月に七十の誕生日を杭州で祝った（寿序）。

西湖畔に隠棲してからは「十畝に懷を寄せる身となった」。隠棲の様子を、張国泰は次のように描く。「淹貫がくかんの余、老圃らうぼを学ばんと願ひ、咏歌の暇、窃に陶朱公に附す。花木によって課を分けてはさながら紫媚紅嬌、禽魚を借って情を娛ませては鱗遊羽化を彷彿している」。このような生活のなかで、『花鏡』を完成した。序文が康熙戊辰二十七年（一六八八）に書かれているので、この年に刊行されたものであろう。

『花鏡』の初期の版本には、陳湊子の自序のほかに、丁澎と張国泰による序がついており、日本で翻刻された数種類の和刻本にもこの三人の序はついている。「墓誌銘」も、特に丁澎の序文に言及している。しかし、のちの時代の版本は丁澎と張国泰の序を欠いている。中国に初期の版本が伝存しないとは信じがたいが、伊欽恒校註『花鏡（修訂版）』は、丁澎の序も張国泰の序も、日本の花説堂が出した重刻『秘伝花鏡』（平賀氏校正）にしかなく、他のどの版本にもない、と述べている。

『花鏡』の版本のなかで、最も重要なのは文治堂本である。『中国農学書録』では、善成堂本、金閨書業堂本が最も早い時期のものだらうとされているが、国会図書館蔵の善成堂本、内閣文庫蔵の金閨書業堂本を見るかぎり、図譜は拙劣、丁澎と張国泰の序が省かれており、どちらも原刻本ではない。文治堂の原刻初印本は日本でも見られないが（文治堂本は国会図書館白井文庫に井岡冽手沢本と「信天窩主人」手沢本の二点、東京大学総合図書館、東洋文庫にそれぞれ一点ずつ蔵せられるが、いずれも後修本である）、序文の書かれた康熙二十七年から二十年も経たない宝永四年（康熙四十六年、一七〇七）に日本に舶載されたのは文治堂本であり（『舶載書目』）、また、陳枚が『状元図考』を増補して文治堂から出した際、資料提供のための連絡先として武林書坊文治堂を指定しているように（『増状元図考』、名古屋市蓬左文庫蔵）、陳枚と（したがって陳湊とも）関係の深い書肆であったことはまちがいないから、『花鏡』を刊行した最初の版元は杭州の文治堂であったと断じてよからう。

「信天窩主人」手沢本について見ると、文治堂本は全八巻からなる。封面は、「園林雅課」と横書し、「西湖陳扶揺彙輯／花鏡／一花曆新裁・一課花十八法・一写生図譜・一花木備考・一培養秘伝・附鳥獸魚虫考／文治堂蔵板」となっている。次に陳湊子の自序、張国泰の叙、丁澎の序が並び、その後に「花鏡図」と題した図譜が置かれ、総目、巻之一目次と続く。各巻は巻一「花曆新裁」、巻二「課花十八法」、巻三「花木類考」、巻四「藤蔓類考」、巻五「花草類考」、巻

六「養禽鳥法」に分かれる。卷三から卷六までの内容に対応する図譜は、原刻部分と補刻部分からなる（巻一と巻二は図なし）。原刻部分にかぎっていえば、絵も彫版も非常に精巧で、なかでも巻六に対応する禽・獸・鱗介・昆虫の図がすばらしい。友人として序を書いた丁澎は、やはり杭州の人、「西冷十子」の一人として知られ、李漁の友人でもある。張国泰は長子陳枚の学友である。自序の署名は「西湖華（花）隱翁陳湊子」である（自序は隸書で書かれており、特に「華」「花」字の区別をしていないようである。丁澎の序では「花隱老人」とする）。

存命中に実名で出した書物としては、おそらくこの『花鏡』が最後のものではあるまいか。

陳湊の没年を明記した資料は見つからない。しかし、『墓誌銘』は、康熙癸未四十二年（一七〇三）十月に、すでに故人となっていた妻戴氏と合葬するときに書かれたものであるから、この年に八十九年の生涯を閉じたものと思われる。

陳湊は、才能と抱負を抱きながら、志を遂げることなく不如意な生涯を送った文人の一人であったといつてよい。当然ながら、その一生は貧窮の二字と無縁ではなかった。彼自身、張孝緒にあてた手紙に、生涯を振り返って、「齢すでに七十に近づいて富貴はついにわたくしを顧みることがなかったのですから、貧に安んじるしかありません」と書いている（『写心集』巻二「答張孝緒」）。しかし、そのような場合、読書人が一般に選ぶ教師稼業のような途を、彼は選ばなかったようである。『花鏡』に「文園館課」「書屋講堂」のことに触れるので、生徒を教えて生計を立てる老書生だったようにも言われるが、『墓誌銘』は、「子雲（揚雄）の亭を闢くことも扶風（馬融）の帳を設けることもなかったが」云々と明言している。張孝緒への手紙に、自分の貧は貧を愛するというのではなく、「苦とする所を為さない」からだと書いているのも、そのことを言ったものであろう。

彼は生活の資を主として文筆にたよっていた。張孝緒への手紙に、「南畝に硯田を徒らにするのは、税金取り立てに遭わなくてはむのを愛するのであり」云々と書いているが、陳枚がこのくだりにつけた評は、「吾が父は一生、貧に安

んじ道を楽しみ、性、著述を耽^{こよ}んだが、数語でその生涯を概括している」というものである。文筆の面での仕事で現在見うるのは、うえにあげた数点の書物であるが、『墓誌銘』によれば、その他に『神仙通考』という未刊の著作を完成していたという。また、明末から清代にかけて度々刊行された通俗類書『万宝全書』のなかに陳湊子撰となっているものがある（東北大学狩野文庫蔵『増補正統万宝全書』、『東北大学所蔵和漢書古典分類目録（漢籍）』）。明清鼎革前から文筆家兼出版業者であり、入清後もその両方にまたがって仕事をした。彼が他の文人のために書物を出す仕事をしていたことは、『写心集』巻四に収める一点の書簡からも知られる。一つは汪肇衍（子泗）が陳湊にあてた書簡で、版木職人への一時立て替え払いを依頼したもの。一つは龔在升（聞園）からのもので、「拙稿災木につき、ご苦勞いただき感謝いたします。ただねがわくは何かとお言葉を添え、せいぜいご吹聴くださらんことを」云々と書いている。

ところで、このように才名をうたわれ、現に文筆によって生計を立てていた人物が、通俗小説『西湖佳話』においてその図版の制作者を代表するように跋語を書いていることを、どう理解すべきか。作者墨浪子はこの陳湊と別人なのかどうか。これについては稿を改めることにする。

附言すれば、長子の陳枚も文筆家としての生涯を送り、康熙四十六年（一七〇七）に七十歳で没した（『留青新集』沈心友の序および同書卷二所収の張国泰「哭陳簡侯文」）。

注

- （一）王青平氏は、この「古吳」を蘇州と見なし、作者墨浪子は蘇州人か蘇州に長らく住んでいた人であり、また、杭州に行ったことがあるとする。同氏「墨浪主人即天花藏主人」（『才子佳人小説述林』一九八五）参照。

(2) 蘇公白傳以通靈之筆描寫湖山、可謂詩中有畫、淡裝濃抹。且能工画家渲染所難工之意、句句是荆關著色山水。何作此凶者？率遇笨伯施之楮繪、已削頰上三毛。疥以梨棗、益覺唐突西子。安得起蕭照馬遠輩一開生面耶？余審此志有年矣。広蒐精訂、得頁若干。画景名賢、句綜往話。即景擬皴、対山設色。苦心剗剗、著意渲染。是工乃蘇白之工、非僅發蕭馬之秘。嚮謂詩中有画、今則画中有詩。勿哂東方自贊、会看西子如生可也。

(3) 『芥子園画伝』二、三集の場合は事情が異なる。二、三集の封面には「芥子園甥館鑄蔵」とあって、沈心友の刊行であることを明示する。龍鳳紋の円印は捺されていない。金陵王衙すなわち王概一家が刊行したものでないからこの印がないものと解し得る。

(4) 誠堂「記『花鏡』作者陳湊子」は、「名は湊、字は扶搖」としているが、これは陳湊が明末に出した書物や方象瑛の書いた「墓誌銘」を見ていないからで、正しくない。

(5) 以下、『花鏡』からの引用は、杉本行夫編訳「秘伝花鏡」に含まれている場合はこれに従う。ただし、旧かな遣いを現代かな遣いに改め、また必要に応じて訳語を一部改めることがある。

(6) 「鑑定姓氏」は次のとおり。文震孟(文起)・丁啓濬(哲初)・顧錫嘯(九疇)・韓敬(求仲)・董其昌(思白)・黃道周(幼玄)・黃端伯(元公)・陳際泰(大士)・葛寅亮(圮瞻)・陳繼儒(仲醇)・艾南英(壬子)・顏茂猷(光衷)・曹勲(允大)・金吉(正希)・張采(受先)・翁鴻業(一嘯)・洪瞻祖(清遠)・張溥(天如)・祁彪佳(世培)・吳太冲(默寅)・錢受益(謙之)・羅万藻(文止)・吳偉業(駿公)・吳本泰(美子)・譚元春(友夏)・徐時泰(見可)・楊廷樞(維斗)・許文岐(我西)・劉侗(同人)・姚奇胤(有僕)・聞啓祥(子將)・孟応春(長民)・陳紹英(生甫)

(7) 「參校姓氏」は次のとおり。鄭尚友(士弘)・傅巖(野情)・周鍾(介生)・陸鳴鳳(夢鶴)・劉士鏞(越石)・趙林翹(梓木)・陳子龍(臥子)・黃毓祺(介子)・張次仲(元帖)・翁祚(子長)・董守論(次公)・洪吉臣(載之)・顧夢麟(麟士)・楊彝(子常)・丘子采(亮臣)・柴世堯(雲倩)・夏允彝(彝仲)・周立勲(勒園)・嚴調御(印持)・嚴武順(忍公)・錢德昌(公積)・鄭壽昌(壽子)・王道焜(昭平)・查繼佐(伊璜)・丁允和(叔介)・鄭玄(玄子)・馮際(嚴公)・陳之杰(穎凡)・嚴渡(子岸)・張泚(幼青)・陳之俊(官宜)・姚玄煥(爾含)・虞宗瑤(仲鳴)・張璠(百常)・張岐然(秀初)・龔五穀(華茂)・李兆勲(仲休)・張玄(天生)・朱建寅(夏朔)・邵泰清(以圭)・虞宗政(大赤)・洪吉符(原明)・卓人月(珂月)・翁立堡(鏘鳴)・顧懋燮(霖調)・戴之軫(伯謙)・徐邦佐(孟超)・吳思穆(靜腑)・邵之驊(先之)・顧蘭(芝侶)・陸有繩(道胤)・朱天璧(子玄)・繆沅(湘正)・王克家(元建)・陳之英(良方)・吳懷古(今生)・鄭鎮(真子)・汪汝祺(壽子)・胡胤嘉(仲衍)・鮑之佐(在公)・吳明中(天一)・顧明德(自明)・梁之虞(深若)・將湛(謬虛)・王子振(維風)

・孫子起(楚卿)・孫毓靈(子奇)・陳五燦(文侯)・陳廷会(際叔)・李瑞麟(元方)・陳之廷(言公)・朱国仕(望之)・沈奇生(長森)・葉洛英(長人)・張奇(乳穎)・陳文華(文生)・張澹(玄生)・莫上勲(幼公)・陳欽(堯心)・段起鵬(負青)・楊儼(若客)・王師古(盡侯)・陳鑑(孔明)・朱錦(天孫)・趙宏国(宗臣)・張国維(又張)・陳瀚(玄勺)・吳亦人(尊我)・陸夢龍(御天)・姚徵(子奇)・姚基虞(爾虞)・高尚友(千秋)・朱彝(孝雄)

(8) 向与兄比屋而居、談心問字之日少、至饑驅出門、念載浪遊。憶昔簞嶺吟風、長廊醉月、渺不可得、始悔在家之不時時請益也。

(9) 君泛扁舟、余除旅況時。征鴻孤夜月、殘菊老霜枝。歷落頻生感、悲涼倩酒卮。寄懷無一可、留別語遲遲。

(10) 陰雨斷送燈宵也、兀兀荒齋。敝簪昨皆北渡、孤宵冷榻竟与老兄同況。便中將門戶付蒼頭、騎一蹇、來談兩日、未為不可。